

52

渡辺清絵日記に見る明治期の農村の医療衛生事情

岡 一雄, 戸村 光宏

塩谷医療史研究会

栃木県さくら市(旧熟田村狭間田)には、農民・渡辺清が明治35年から大正13年まで綴った35冊の絵日記が残されている。特に明治39年から大正5年までの30冊は一部空白はあるがほぼ連続した絵日記となっている。

通称百姓絵日記と呼ばれるこの絵日記を残した渡辺清は、明治25年生まれで、地元の尋常高等小学校高等科を卒業した後、一生涯農業に従事した当時の農村地帯の一般的な農民である。もともと絵を描くのが好きだった清少年は好奇心旺盛な目で明治期の日本の農村地域の移り変わりを観察し、生き生きとした絵と文章を組み合わせた絵日記を残してくれた。特に生業としていた稲作を中心とした農村地域の農民の生活は詳細に描かれており、当時の農作業、習俗、出来事などを知ることができる極めて貴重な資料であり、地域の記憶遺産でもある。

日記は、農業や農村社会の生活を記したものが多く、江戸以来の在来農法と近代化や地域社会の生活と変化を知ることができる第一級の資料であるが、一部に街道を通過する人馬鉄道や馬車、鉄道の普及、陸軍大演習などの記載や医療衛生、民間療法に関する記載などがあり、社会史の資料としても重要である。われわれ塩谷医療史研究会はこの日記の記載から、それまで名前だけしか知られていなかった当時のこの地域にあった五十嵐病院という婦人科疾患を得意とした医療機関の存在を確認することができた。

当時の医療衛生に関しては、地域の町医者が出張して行った種痘接種(痘植と記載されている)の様子や衛生観念を普及するために農民を対象として頻繁に行われた衛生講話・幻燈会の様子、伝染病防疫のために巡査や区長の監督見回りのもとに、春秋の2回各家庭で家屋の内外を生石灰などを用いて清掃消毒した大衛生清潔法、近所で伝染病が発生した時の地域の緊迫感や避病院(避病舎と記載されてる)の建築で大工が忙しい様子など、当時の社会で大きな問題であった伝染病関連の記載を認めることができる。

また、歯痛ですりおろした大根をつけたが治らず、町の歯医者にかかったこと、わざわざ遠くの医療機関まで眼科疾患でかかりに行ったことなどの医療事情や民間療法についても書かれた箇所も見出すことができる。

今回は、それらの絵日記を提示することにより、公の報告書や医療従事者など専門家が残した記録ではなく、生身の庶民の書いた記録から、当時の農村地帯の医療衛生状況を示し、明治期の医療の背景を含めて考察した。